

講評文：劇団激男vol.4『絶対あいつ宇宙人だけど、りんごは木から落ちる。』

作成者：西田悠哉さん(劇団不労社 代表・劇作家・演出家)

観劇日：2026年1月16日13:00 - (公開ゲネプロ)

西田悠哉さん

(劇団不労社 代表・劇作家・演出家)



撮影：宇治田峻

《応援コメント》

ソーラーパネルとゴキブリに埋め尽くされ「黒い球体」と化した未来の地球を舞台に、ラブホテルの周縁で繰り広げられる人類と宇宙人と機械による横滑りの(ディス)コミュニケーション。

持ち味である幻想的なビジュアルと躁鬱的なフラストレーションはそのままに、突飛な情景からアクロバットに旋回しながら、愛や孤独という普遍的な情感へ挑んだ意欲作。

豊岡を拠点に、昨年大阪から全国の学生演劇祭へと駒を進めた劇団激男-ケキタソ²による初の単独大阪公演、どうぞお見逃しなく。

《講評》

本作の作・演出を務める林さんの作品は、審査員として参加した奈良学生演劇祭2023と大阪学生演劇祭2024にて、過去2回拝見していました。驚かされたのはその振り幅です。奈良で見た作品は、顧問の死を機に再会した若者たちによる、静謐な現代口語演劇の秀作であったのに対し、大阪では、幼児の発表会を乗っ取る「お遊戯代行サービス」を軸に、ハイテンションでドラッギーなパフォーマンスを繰り広げていました。その作品に対する自分の率直な印象として、いずれも光るところはありつつ、前者は地に足が着いたまま小さくまとまり“過ぎ”しており、逆に後者は飛躍の連続により理解不能なレベルまでイメージが広がり“過ぎて”いるように感じていました。これらの静と動、鬱と躁、収縮と拡散といった二つのトーンを、それぞれ振り切って描ける作家であれば、そのあわいにこそ真の作劇の魅力があるのではないかと感じていました。(物腰の柔らかさとギラついた野心が同居する林さんのパーソナリティも、私の妄想的な期待を膨らませていました。)

その上で、今回拝見した作品は、林さんの実感や手触りを残し、まさにその振り幅の中を往復するような新境地に挑んでいるように感じました。

平田オリザ氏は『対話のレッスン』にて、既知の人物同士のコミュニケーションを「会話」、未知の存在とのコミュニケーションを「対話」として区別しました。宇宙人との邂逅という、まさに“未知との遭遇”を起点に進行する本作

ですが、上記の区別における「対話」は基本的に起こりません。人間・機械・地球外生命体という異なる属性のキャラクターたちは、お互いの素性や出自を探り合うことはなく、惑星の軌道のような横滑りの「会話」を続けます。そこに浮かび上がるのは、ラブホテルへと身を寄せ合う登場人物たちの姿、そしてその周囲に潜む対話不可能な「更なる未知」への脅威です。

タイトルにも予告されているように、私はこの作品を引力の物語だと考えました。

なぜ地球が宇宙空間へと落下しないのかを考えていたニュートンは、木から垂直に落ちるリンゴを見て、ミクロからマクロへと想像を及ぼし、果物から天体に至るまで、質量を持つ全ての物体間に働く引力＝「万有引力」を発見したと言われます。本作もまた、ラブホテルに集った人々のミクロな会話と、その周縁を回る宇宙船によるマクロな独白によるコントラストによって、目に見えない引力のような力へと思いを巡らせる構成となっていたかと思えます。またその引力は、舞台中央にそびえ立つラブホテルに象徴されるように、性的なエネルギーを媒介して表象されます。

カンパニーの名前にも冠されている「男」という存在は、林さんにとっても重要な関心事項であり、過去作から通底するモチーフだと思います。表出される男性性のベクトルは、必ずしも力強さや勇敢さではなく、むしろそれを駆動するエネルギーの根源の方に向いていると感じます。言葉を選ばないのであれば、「射精」を描きたいのではなく、「勃起」してしまうことへの戸惑い、そしてその後を訪れる「賢者タイム」的な虚無感こそが、興味の中心にあるのではないのでしょうか。『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』等の作品で知られる映画監督・ダニエルズは、インタビューで「この世の中には2種類の間がある。半分は、おならのジョークを上品だと思ふ人たち。残りの半分は、おならのジョークの人生の一部でほかのものと同様だということことに気づいている人たち。」

(引用元: <https://wired.jp/article/everything-everywhere-all-at-once-daniels-interview/>)と語っていますが、きっと林さんも後者の人でしょう。本作でも卑俗な言葉遊びや下ネタが、単なるユーモアに留まらない広がりを見せます。劇中で「唾えたいものランキング」として口淫の話題が出てきますが、口淫とは自らの穴(口)を塞ぎつつ、対象の欲望を活性化させる行為です。またタバコを吸う場面が反復されますが、これも口淫と同様に、自らの穴を塞ぎながら対象を“燃焼”させる行為と言えます。劇中、文字通り行われる「指を唾えて見る」という行為も然り、「口に唾える」＝「穴を塞ぐ」という言葉や行為は、自傷的な痛みと倒錯的な快樂を伴いながら登場人物たちの埋めきれない欠落を際立たせます。

テクノロジーの進化により、人類はポルノに容易にアクセスできるようになったが、果たしてそれは幸福だったのだろうか。電力を消費しながら手軽に得られる快樂、そしてそれに伴う虚無が、むしろ人類の退廃を加速させているのではないだろうか。穴を塞ぐようにラブホテルへと引き寄せられ、肩を寄せ合う人々。ロマンチックな言い方をすれば、その穴のことを「孤独」と言い、引き合う力を「愛」と呼ぶのかもしれませんが。しかし、人々は「対面」をするも、「対話」に至ることはできない。ただただ人と人の間に働く引力によって一緒にいることしかできない。他者を求める気持ちは、リンゴが落下するような、物理法則に従った自然現象でしかないのだろうか。しかしそれもやがて終わりが来る。惑星にも人間にも寿命がある。奇抜なシチュエーションを介して回り道しながらも、最終的にいつか来る「更なる未知」への脅威へと直面させられるような上演でした。

課題としては、これらの情感をまとったテクスチャをいかに観客に「説得力」(「説明」ではなく「説得」)を持って提示できるかだと思います。物語の構成ではなく、情緒で観客をリードしたい場合、より感覚的なレベルで観客を巻き込む必要があると考えます。その点では、本作は匂い立つような「生々しさ」が欠けていたと感じます。ゴキ

ブリの氾濫に代表されるような、本来想起されるべき退廃的でグロテスクな情景描写は、台詞による「説明」にとどまり、観客側が前のめりに想像しないと受容しにくい劇世界となっていた印象があります。また突飛な設定の中で丁寧に劇を進行すること自体は好感を持ちつつも、その丁寧さが仇となり、転換も含めて全編を通じたリズムが単調になってしまっているように感じました。蛍光灯やネオンを用い、顔を取ることで影やムードを作ることにより重きを置いた照明効果、ノイズを基調とした音響効果はそれぞれ魅力的でしたが、それらが破綻寸前のタイミングやレベルでせめぎ合うような場面が構成できると、上演がよりスリリングになるかと思えます。

ゲネの最中、近隣で行われている工事の音が壁越しに聞こえてきました。台詞を掻き消すほどの爆発的なボリュームで鳴り響くインパクトドライバーの音でしたが、不幸中の幸い(?)、良いアクセントになっていたように思いました。取ってつけたような例になってしまうのですが、あれくらいの「生」の質感が挿入されると、より舞台上の緊張感に奥行きが出るかと思えます。舞台空間の中で自閉させないような「外部の予感」のようなものが大事なのかもしれません。演出のレベルで、受け身の観客も感覚的に引きずり込むような説得力のあるアイデアが加わると、作品が持つ虚無感や温もりが、「現象」として一層痛切に際立ったように思えます。また次の公演も楽しみにしています。



(撮影: 脇田 友)